

交通事故ゼロの願いを込めて!!

5月22日(水)に、第53回交通安全鼓笛パレードが、須賀川市内の小学校・義務教育学校11校789人の参加により開催されました。保護者や市民の皆様の期待の下、須賀川二小をスタートした児童たちは、大町交差点まで松明通りを行進し、校歌やウルトラマンメドレー、ポップス曲など元気な演奏を披露しました。



第1回特別支援教育研修会

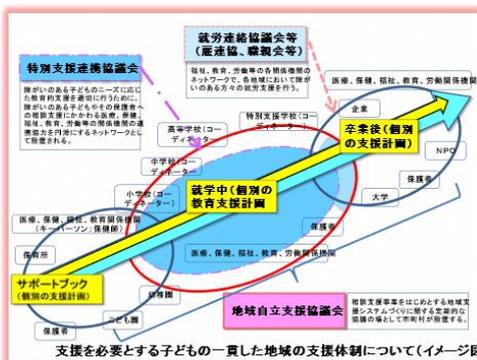
5月30日(木)に、令和6年度第1回特別支援教育研修会が、特別支援教育コーディネーターや特別支援教育支援員を対象に行われました。特別支援教育コーディネーター部会では、社会福祉協議会の柴山彩香看護師を講師として、「サポートブックの活用について」というテーマで研修しました。サポートブックとは、支援が必要な子どものことがよくわかる「情報ブック」であり、保護者が学校や療育等の関係者に同じことを説明する負担を軽減し、支援者側も統一した情報を受け取ることができ一貫した支援のためのツールであるという説明がありました。各学校では、特に就学前から就学後、そして



卒業後に向けて支援が必要な子どもの情報を関係機関と連携しながら、一貫して引き継ぐために活用していただきたいと思います。

ガイディングスター

「インクルージョン」について、当時帝京科学大学教授で、元国立特別支援教育総合研究所の研究者であった滝坂信一氏が、県特別支援教育センター所報(第66号 2013)の特別寄稿で次のように述べています。「もう13年前のことだが、ユネスコ教育におけるインクルージョンを推進する役割をとり、国内でもその推進者の一人であったオスロ大学のK.スコーゲン氏にインタビューする機会があった。その中で『インクルーシブな社会は、インクルーシブな学校は、ノルウェイではいつ実現するでしょうか?』と尋ねた。返ってきた答えは、『**タキサカ、インクルージョンは私たちを導くガイディングスターなんだよ**』だった。私にとってインクルージョンは、私が生きている間かどうかはともかく、そう遠くない日に実現するものとしてあった。しかし彼は、それは指標(ガイディングスター)であり、届くことのない北極星や南十字星だといふのだった。この言葉は、インクルージョンは決して実現しないという絶望、諦めを含んでいるようにとれる。しかし、人々の感じること、考え、生き方の多様性を前提にしたとき、このようにしか言いようがないこと、それは決して諦めではなく、そこから始め持続する意思をもって取り組み続けること、それが最も確実な途であることがわかる。」ぜひ「インクルージョン」について、それぞれの職場で語り合ってください。



須賀川市立学校教頭研修会

5月31日（金）に、令和6年度須賀川市立学校教頭研修会が開催されました。研修の前半では、教育支援センター（教育研修センター兼務）の庄司康生指導主事から、「Collaborative L.における教頭先生の仕事」というテーマで講義がありました。その中で協同学習について、全部が一つになる「もち」と一つ一つの花が集まって一つになる「あじさい」との違いや、 $A+B=C$ になる理科の実験で使う「るつぼ」といろいろな野菜を混ぜてサラダにする「サラダボール」の違いについて教頭先生方に話し合ってもらいました。協同学習の中で



授業や活動は進みますが、一人一人の姿やその学びは？という視点で振り返ることの大切さや個の学びには「他者」が必要であるということを確認しました。また研修の後半では、教育研修センターの本多淳嗣指導主事から、「教頭先生を中心とした学校事故防止」というテーマで講義がありました。最初に本多指導主事が初任の教頭の時に校長から訓示を受けた「教頭学に関する8ヶ条」の説明があり、その後具体的な事例を元に、グループに分かれて教頭としてどのように対応するかについて話し合いました。



「良し悪し」から抜け出ること 《コラム No.10》

「聴くこと」「聴き合う学び」また国語の授業についての見識の深さにおいて、石井順治先生の右に出る方はいないでしょう。石井先生は若い頃、三重県の小学校教師をなさっていて佐藤さんと知り合い、校長退職後も一貫して「聴き合う学び」について探究と指導を重ね、今も全国を回っています。昨年、須賀川一小を訪問、一小の先生方も熱心に国語の授業にチャレンジしました。今年度も7/1(月)と2/10(月)の二度、一小を訪問なさる予定です。

私たちは、授業や子どもの発言について、また授業の方法について良し悪しで見がちです。“いい授業だった” “あの発言はよかった” “この方法の方がよい”等。(もちろんその逆もです。)しかし、ここから脱却、あるいは別の軸も持たないと、子どもの学びの姿、そしてそのつながりを観ることはできません。それを私に痛烈に教えてくださった石井先生のエピソードがあります。正確に言うと、石井先生のエピソードについての私の質問に答えた石井先生のお答えが痛烈でした。

ある授業研で、参観の後ビデオを見ながらディスカッションしようとしたらカメラが故障して撮れてなくてどうしようとなった時、石井先生が「子どもの発言はだいたい私の中に入っていますから書き出してみます」とサラサラっと120だか140発言を書き出され、それをコピーして配ったら、参加者から「私のは撮れていますから見ますか」と申し出があり、石井先生のコピーとビデオで研究会をしたそうです。石井先生のメモは、細かい文言は別として流れとつながりがほぼ正確だったそうです。

この話を聞いた私は後日、石井先生に「どうしたらそんなことができるのですか」と尋ねました。するとまず「ああ、たいしたことないんですよ」と謙遜されました。できる方はよくこういう言い方をしますが、できない私にはけっこうショックなジャブ・・・そして続けてこうおっしゃいました。「発言を一つ一つ覚えようと思ったら、そんなことできるはずありません。」でも「子どもの発言は、必ず〇〇〇と〇〇〇〇〇〇〇から。」(〇は、ひらがな一文字ずつ)

この言葉が、「良し悪し」から離れて授業と子どもを観るための私の苦闘(2,3年間)をもたらしたのです。続きは次回。次回の前に石井先生が一小にいらっしゃいます。興味のある方は、直接石井先生に尋ねてみてはいかがでしょうか。きっとていねいに笑顔で教えてくださいますよ。